

## 第1回浜松地区大学再編・地域未来創造会議 議事録

開催日時：令和2年10月28日（水）9:00～10:20

開催場所：浜松市役所庁議室

出席者：・浜松市長	鈴木 康友
・浜松市議会議長	鈴木 育男
・浜松商工会議所会頭	大須賀 正孝
・一般社団法人浜松市医師会長	滝浪 實
・公益財団法人浜松地域イノベーション推進機構 フotonバレーセンター長	伊東 幸宏
・公益財団法人浜松地域イノベーション推進機構 次世代自動車センター長	望月 英二
・国立大学法人静岡大学長	石井 潔
・国立大学法人浜松医科大学長	今野 弘之

報道：11社

---

### 次第

- 1 開会
  - 2 市長あいさつ
  - 3 出席者紹介
  - 4 議事
    - ① 会議名称について
    - ② 静岡大学、浜松医科大学の将来像について
    - ③ 意見交換
  - 5 その他
  - 6 閉会
-

## 1 開会

(企画調整部長)

定刻となりましたので、ただ今から第 1 回（仮称）浜松地区大学再編・地域未来創造会議を開会いたします。

はじめに浜松市長からご挨拶申し上げます。

## 2 市長あいさつ

(市長)

第 1 回（仮称）浜松地区大学再編・地域未来創造会議にご出席いただきありがとうございます。平成 31 年に静岡大学と浜松医科大学の統合とそれに伴って、静岡地区大学、浜松地区大学に再編することが機関決定の上、合意されました。それを受け、市としても協力するというので、事務スペースの貸出しを行っています。さらに今後、様々協力できる取組をしていこうと考えており、令和 3 年度に新大学がスタートするというスケジュールになっているため、我々として協力できる取組をしてみたいです。行政だけでなく、地域の経済界、医学界などオール浜松で応援していかなければならないということで、このような会議を設置しました。

9 月 24 日には萩生田文部科学大臣に伺い、浜松では地域を挙げてコンソーシアムを結成して取組を応援するというので、文部科学省としても後押しをしていただきたい、とお願いしました。大臣からはいい回答をいただきました。心強く思った次第でございます。ぜひ、この会議を未来に向けて、発展的な創造的な話し合いの場にしていきたい。皆さんから忌憚のない意見をいただき、浜松を挙げてこの取組を応援していきたいと思っております。よろしく申し上げます。

## 3 出席者紹介

(企画調整部長)

ありがとうございました。それでは、お手元の次第に従いまして進めさせていただきます。次第 3 の出席者紹介ですが、本日配付いたしました出席者名簿に代えさせていただきます。

なお、御室浜松いわた信用金庫理事長はご欠席でございますが、会議に際し、コメントをお預かりしていますので、後ほどご紹介させていただきます。

それでは議事に移ります。ここからの進行は座長であります浜松市長にお願いいたします。

#### 4 議事

##### ① 会議名称について

(市長)

まず、次第4の①会議名称について、事務局から説明をお願いします。

(企画課長)

本会議の名称についてということでございますが、現在、(仮称)浜松地区大学再編・地域未来創造会議という名称にしてございます。本日1回目の会議ということでご了承をいただけましたら仮称をとって、正式名称としたいと考えています。

(市長)

今の説明に対して意見がありましたら、お願いしたいと存じます。

ご意見がありませんので、会議名は浜松地区大学再編・地域未来創造会議に決定いたします。

#### 4 議事

##### ② 静岡大学、浜松医科大学の将来像について

続きまして、次第4の②静岡大学、浜松医科大学の将来像について両大学から説明をお願いしますと存じます。

(静岡大学長)

まず、最初に今回両大学で進めている統合・再編につきまして、地域を代表する方々からなりますこのような会議を立ち上げていただきましたことを心より感謝申し上げます。我々は地域との協力を非常に重視して運営してきておりますので、このようなサポートの会議を設けていただき心強く感じております。最近、新聞紙上で取り上げられている次期体制について、後ほど詳しく触れさせていただきます。しっかりと引き継いでいくため、ご心配はございません。

それでは、お手元のパワーポイントの資料をご覧ください。私から全体像とこれまでの経緯を説明し、今野学長から浜松地区で計画している新しい大学の構想についてご説明いただきます。

1枚目のスライドにありますように静岡国立大学機構という新しい法人の下に静岡地区大学、浜松地区大学という2つの大学を置くというのが現在、合意書に基づいて両大学で協議を進めているというところであります。静岡県全体、それからそれぞれの地区の発展を考えたときに、それぞれのキャンパス、それぞれの地域の強みを生かしていくことが今後の発展の基本的な方向であります。静岡大学内部をとりましても特に浜松キャンパスで

は、より自立的な運営をしたい、その方が地域連携などしやすいという声もともとありました。今回、浜松医科大学との法人統合ということがありますので、この機に浜松地区大学としてまとまった方が動きがとりやすかろうという声がありました。

静岡でも今後の発展を考えると静岡県立大学という非常に優れた大学が静岡地区にあり、学部の構成を考えるとうまく棲み分けができています。静岡地区での大学を超えた連携を考えても地域単位の大学運営が都合がいいということがございました。ということで一つの大きな法人の下に 2 つの大学を置くということで現在構想を進めているところでございます。特に静岡地区大学については、資料に学部の構成がありますが、人文、教育、理学、農学という 4 つの学部がございます。これはいずれも長い伝統をもつ学部があります。これからの社会を考えていくときに SDG s ということも言われていますし、アフターコロナの社会がどうあるべきかという未来社会のデザインも広く言われています。広く社会の将来像を考えたときに文理双方の学部を持ったキャンパスは非常に大きな強みを持つと考えております。今年 4 月には、この静岡キャンパスを拠点とした未来社会デザイン機構という新しい組織を立ち上げて、キャンパス一体となって、キャンパスだけでは背負えない領域については、浜松の協力を仰ぎながら新しい方向を出していきたいと考えています。

我々にとって大きな魅力は、今まで医学部のない大学でしたので、医学、看護の領域は今後の高齢社会、コロナ後の社会にとって不可欠な分野であるため、これらと協力できることは大変ありがたいと思っています。これは、静岡地区大学として地域連携を進めていくときに浜松医科大学が持っている人的資源が発展に大きく貢献すると考えています。

先ほど市長から平成 31 年の両大学の合意書についてすでに言及いただきましたが、構想にいたった歴史的経緯について、ご説明いたします。私が学長に就任した平成 29 年に中央教育審議会において、国立大学で 1 法人複数大学制度を導入するという方向性が示されました。それまでは、アンブレラ方式は認められていなかったわけですが、大学間の連携を進める上で重要なものであります。ご存じのとおり、名古屋大学と岐阜大学は国立大学法人法が改正され、1 法人複数大学となりました。双方の学長の発言を伺うと、両大学にとってプラスになっているということでございます。この制度ができたときに今野学長と話し、長年懸案になっていた静岡大学と浜松医科大学の関係について、制度をうまく利用すれば新しい体制ができるであろうということで学長間で合意を取り、平成 30 年に両大学間で連携協議会を立ち上げました。約 1 年間の学内の審議及び両大学の協議を経て、昨年 3 月に合意書の締結にいたったものであります。現在は、両大学で連携協議会を設け、両大学の理念、法人の運営の仕方等のテクニカルな面について議論を進めています。今年になって、静岡市から進め方についての疑問やご意見を伺ったため、静岡大学将来構想協議会を共同で立ち上げ、現在 4 回、静岡市と大学間で協議会が行われています。現在、協議会の下にワーキンググループを作って、最終的な取りまとめにあたっているところでございますが、これらも参考にしながら今後、統合・再編の構想をまとめていきたいと考えているところ

でございます。

この会議と静岡市の会議は両方とも我々にとっては大切で、両地域の声を真摯に受け止めていきたいと考えています。

最後に、来年の4月から日詰教授が後継の学長となりますが、学内の意向投票の結果等について慎重派という報道がございました。しかし、学長は学長選考会議という組織が決めるということになっています。必ずしも教職員の投票で自動的に決まるという仕組みにはなっていません。どの国立大学もそうですが、静岡大学の選考委員は半数が学内、半数が学外の経営協議会の委員から選ばれることになっており、大学内の都合だけでなく、より幅広い視点から次期の学長を選ぶことになっています。学長選考会議の榊議長から新しい学長の選考結果の報告を受けたときに、機関決定したことを急展開して変えることはよくないと学長選考会議として考えているので、両大学の合意書を尊重するというのを新学長にも確認していると言われていました。学長選考会議は強い権限をもっており、新しい学長を選ぶだけでなく、学長在任中に学長の業績を評価して、また必要に応じて助言を行い、学長が適切な運営をしていない場合には学長を解任することもできる権限を持っている組織でございます。学長選考会議との間で、日詰教授が合意書の尊重を約束したということは組織にとっては大きな意味を持っています。また、日詰教授は私も尊敬しており、大変ジェントルマンで一時しのぎで約束するタイプの方ではないため、その点では信頼しています。実際に日詰教授は記者会見や新聞インタビューや学内会議でも自身の発言をしていますが、個人の意見は個人として、学長としては機関決定した合意は守るとというのが自分の立場であると言われていましたので心配は必要ございません。以上です。

(浜松市長)

ありがとうございました。それでは、今野学長お願いします。

(浜松医科大学長)

まず、最初に浜松市長を座長として、両大学の再編・統合を支援し、かつ、地域の未来を創造するための浜松地区大学再編・地域未来創造会議を設けられたことに心から感謝申し上げます。本日は大変お忙しいところ、各界の重鎮の方々にお集まりいただき、これからのいろいろなアドバイスをいただくことになると思います。本当にありがたいことだと感謝しております。

静岡大学と浜松医科大学の歴史を振り返りますと、静岡大学は100年の歴史を持っております。浜松キャンパスは、皆様ご存じのとおり、有為な人材を数多く輩出して研究、産業の発展に貢献してきたことは、確かな事実です。浜松医科大学は開学46年になりますが、地域の皆様から愛され、育まれてきました。医学科の卒業生は4,049名、看護学科は1,535名に達しております。それぞれが地域のみならず、全国の医療現場、医師会の運営、研究や行政とさまざまな方面で活躍しています。このように静岡大学浜松キャンパスも浜松医

科大学も良好なパフォーマンスで歴史を重ね現在にいたっているところでございます。

一方で国が科学技術、イノベーション促進を謳っており、医療、医学は核となることは間違いありません。これまでの産業構造から環境、健康などを目指す産業がこれから発展していくことでしょうし、その中において、医療、福祉は極めて重要な産業を担うことになると多くの方が言っております。この中において、新しい大学について申し上げます。

資料の 2 枚目をご覧ください。浜松地区の大学は我々の医学、看護学分野と浜松キャンパスの工学、情報学が一緒になります。これは日本初の学部構成を持つ、まさに Society5.0 における先鋭的な大学であります。国の期待に十分応え得る新大学と考えています。メディカルサイエンス、光医工学、医用工学、情報医学等の分野横断的な専門教育が可能となりますし、数理・データサイエンス教育等 AI 化時代に必要な基盤教育が実施されます。これにより、分野横断的な教育が可能となります。このことが人材養成において持つ意味は極めて大きいものがございます。今の大学は学生が要望するような修学ができる構造になっていないという批判がありますが、新しくできる医学、工学、情報学、そしてその分野横断的な大学は学生が希望するような分野を提供し、修学する機会を提供できるわけがあります。先般、本学で手術支援ロボット「ダヴィンチ」の体験会を行いました。浜松キャンパスの学生にも声をかけ、10 人の枠でしたがあっという間に定員がうまりました。きわめて熱心に体験していただいて、その後のアンケート内容も前向きなものでした。医療工学をやりたいという学生も複数いたわけでありまして。

医療に対する影響についてご説明します。我々の使命は高度で安全な医療を皆様に提供することです。これから、新型コロナウイルス感染症等の感染症の予防医学や、救急医療、オンライン、遠隔診療が発展することとなります。また、ビッグデータを活用したスマート医療、Society5.0 における AI 化ホスピタル（スマートホスピタル）が実現可能となります。また、医師の働き方改革が盛んに言われておりますが、AI 等を用いた医療のタスクシフトによって、余裕をもった医療ができる環境ができます。新たな価値、イノベーションの創出という意味では、健康寿命延伸による機器システムの開発や異分野融合による産学官金の連携がさらに促進します。そして、我々はいろいろな問診データを集積していますが、生活環境や習慣のデータ集積で未病の段階で、より健康で活動的な社会の創造ができることとなります。学部学生や大学院生による分野横断的な大学発ベンチャーの促進も十分視野に入ることとなります。この浜松地区の新大学は Society5.0 時代の理想的な組み合わせによる次世代をリードする教育・研究を展開することができます。医学、工学、情報学の連携融合による AI 化医療時代における新たな医療機器の開発や医療情報の利活用によるウェルネス社会への提言などの取組が一気に拡大します。医療の DX（デジタルトランスフォーメーション）も加速させ、健康で豊かな社会を実現させるための医療基盤また、産学連携も推進できるものと考えております。

資料 3 枚目をご覧ください。これは浜松市との関係でございます。平成 29 年に鈴木市長と私の間で包括協定を結んでいます。静岡大学は平成 18 年に浜松キャンパスを中心にした

産学連携に関する包括協定を結んでおり、すでに連携の基盤は10年以上にわたって構築されておりますが、この新大学の設立によって、この大学と浜松市の連携は極めて強固になります。いろいろなことが行政と一緒に可能になると考えております。地域社会や国際社会で活躍する人材の育成、これは分野横断的な高度専門教育とともに、これからは転職が当たり前になると言われていますが、リカレント教育にも有効なツールとなります。また、バイオデザイン、海外からの招へいやトップガンのハイレベルな教育が可能となります。地域産業の活性化に関して、浜松にはやрмаいか精神、チャレンジングスピリットがございます。これに学生や大学院生の若い層が啓発され刺激を受けて、そして起業にも取り組むようなことで新しい息吹が吹き込まれると期待しております。医療において、「MDX」これは私の造語でありまして、メディカルデジタルトランスフォーメーションを目指しております。一番重要なことはDXを何のためにやるのかということですが、これは当然ながら患者様のためにやるものです。そのため医療のDXを促進していきたい。具体的には、ある程度ロボット化を進めるとともに、例えば外来について、患者から見ると医者はさっぱり患者を診ない、パソコンばかり見ているといわれることがあります。DXを活用することで、患者と真正面向き合っ、医療の最初のステップである傾聴ができ、コミュニケーションスキルを磨くという医師本来の医療のあり方が実現できると思っています。これによって、医療の質を上げてモデルケースとなるようなMDXを進展できる。これはどうしても工学部、情報学部の協力が必須であります。新しい大学の病院はこのようなことが可能であり、こういうモデルが全県、全国に広がっていくと感じています。浜松市ではすでに浜松バレー構想やデジタル・スマートシティ構想など素晴らしい構想を打ち出し、予防・健幸都市浜松と謳っているわけでありまして、我々、新しい大学においては知識集約型産業、知識集約型社会における知の拠点（ノウリッジハブ）として浜松市にいろいろな方面から貢献できるものと確信しています。この大きな改革は静岡大学も浜松医科大学も開学以来の初めてのことです。まさに千載一遇のチャンスであります。このチャンスを逃すのは、この地域だけでなく静岡県、ひいては国においても大きな損失になると思います。また、我々は教育者であります。新しい大学は医学と情報、医学と工学を学びたい、いろいろなことを勉強したいという若人に修学の機会を与えることとなります。彼らの新しい未来を創ることができます。これが1年遅れることでその年入学するであろう人たちの修学の機会がなくなってしまうこととなります。我々は次世代を担う若い人たちのために、彼らが望むような彼らに知的な刺激を与えるような教学の場を提供する必要があると考えています。

本日、ぜひ、皆様には忌憚のないご意見をいただきながら、我々としてさらに新しい素晴らしい大学を作るべく尽力していきたいと思っております。よろしく申し上げます。

#### 4 議事

##### ③ 意見交換

(浜松市長)

ありがとうございました。今、石井学長、今野学長からご説明をいただきました。これについて皆様からご意見を頂戴したいと思います。

では、浜松医科大学出身の滝浪浜松市医師会長からよろしくお願いします。

(浜松市医師会長)

まず、この会議に参加させていただきありがとうございます。大変光栄に思います。また、会議の委員に選出されたことにウキウキ、ドキドキ、ワクワクしています。

統合・再編というのは今回初めて進んでいます。地域からも応援団がたくさんございます。現場で我々医師をしておりますが、医師の家族、御子息等目指すは地域での医療を拡充するというので、その人材育成のために大学にあこがれをもって動いているところがございます。若い年代では方向性が分からないところがございます。多角性というか多職種の人から情報を得られることは大変ありがたいことで医療を進め、選択していくということに関して、この浜松医科大学と静岡大学の統合において、多くのメリットをいただけていると思っています。ご説明いただきましたが、次世代の若者がみたら、チャンスがいろいろあると夢を振りまいていただいていると思います。感謝するばかりです。地元の医師会として、浜松地域はある程度、医療の充実に関して尽力しておりますが、県においては、日本においては、医療人材が少のうございます。ぜひそういった人を作ってもらいたい。全人的な育成が必要になると思います。単科では方向性が狭いが、人文や哲学、教育、ひきこもりや発達障害などの精神的な問題もございます。それから、自然科学的な分野でいうと研究、バイオ、いろいろところで協力を得られるようなところがあると才能を生かすことができると思います。人材育成がいろいろな面で成熟する形が持てると思います。医療は昔ながらの町医者から始まり、看取る医者が当たり前のようにいたわけですが、この時代において、情報や工学等のスキルアップされたものとの接点をもつことで我々の医業がさらに患者さんのためになると思います。本当に統合・再編を応援したい1人です。ぜひ全学で情報共有をしていただき、願わくば、交流会をたくさんしていただき、チャンスやアイデアを増やしていただきたい。構想を早急に作っていただければと思っています。

(次世代自動車センター長)

私の立場から申し上げます。

浜松地域は輸送機器関連事業者が多く、輸送機器関連の産業に関わっており、また、中小企業支援をしております。そういう立場でこの統合・再編でどうなるかを前向きに申し上げます。自動車産業は現在「CASE」といって、次世代自動車はコネクティッド、オート



ノマス、シェアリング、エレクトリック（電動化）というこの4つの技術課題をもって、次世代に向けて進んでいます。そういう中で中小企業がどのように対応すればよいかということの支援をしています。次世代自動車は工学と情報がコネクティッドにあたります。自動運転は、完全自動運転に行くまでは、ドライバーモニタリングと言って、医療と工学を組み合わせた技術によって自動運転の技術が向上していくという意味では、次世代自動車は工学と情報と医療が自動車の技術に盛り込まれていきます。中小企業がそれにどのように対応するかという中で2つポイントがあります。1つは医学、工学、情報学が一緒になり、教授のテーマが次世代自動車に関わる研究をやっていただく機会が増える。ということは、この次世代自動車に関わる開発をしたときに教授に相談できるし、逆に研究テーマを与えることができることとなります。あるいは、中小企業が連携するチャンスが増えるという意味では、この技術という面でのメリットが大きいというのが1つ目です。

2つ目ですが、グローバルでもいい大学になるということは人が集まるということです。海外からの優秀な人材が医学、工学、情報学に関わる勉強をしていただける。中小企業には高度なエンジニアを雇えるチャンスはあまりないため、留学生が浜松地域に留まって貢献したいという方々を中小企業支援として10年ほど働いてもらうなど、そういうグローバル人材を拡充するという機会も増えるのではないかと考えています。輸送機器、中小企業という立場で申し上げました。浜松において、中小企業の力をなくして発展はないと思っておりますので、統合・再編はメリットであると考えています。期待しています。

（浜松市長）

本市では、浜松ウェルネスプロジェクトをやっておりまして、スタンフォード大学の池野先生が乗れば乗るほど健康になる車を作ろうと考えています。いろいろなセンサーを使って乗っている間の健康管理をしている。この技術開発には医学と工学の融合は大変重要になります。

（次世代自動車センター長）

たくさん集めたデータを情報がどのように生かすかということも重要になりますので3分野の統合は大変重要であると思っています。

（浜松市長）

ありがとうございます。

それでは、かつて、静岡大学長を務められた伊東フォトンバレーセンター長お願いします。

（フォトンバレーセンター長）

先ほど今野学長から医学の分野から話をいただきました。

元情報学部長として、工学、情報学の立場から統合・再編について語らせていただきます。工学も情報学も実学です。現場がある仕事です。工学も情報学も産業界と大学が組むことで現場を意識した研究、教育ができて、それが浜松の強みでした。それこそ輸送機器や光ですとかこの地の企業とタッグを組んで現場に即した教育研究をすることが浜松の強みでありました。しかし、そこに医療現場はありませんでした。現在も共同研究ということで研究は進めていますが、日常的に語り合えるような現場をつくるのが幅を広げるためには不可欠です。特に日本全体の産業構造の変化に工学、情報学が対応するためには医療現場と日常的に会話ができる環境は必要になると考えています。

それから未来創造会議ということで明るい夢を語らなければなりません、18歳人口が急激に減少します。自分が学長の時は、18歳人口が118万人でした。その後、100万人を切るのがあつという間です。18万人の18歳の新入生がいなくなるわけです。大学進学率を50%とすると9万人の新入生がいなくなるわけです。日本の国立大学と公立大学の入学定員を全部合わせて7、8万人です。9万人の新入生がいなくなるということは国公立大学が全部募集停止したとしても私学に今まで通りの学生が行き渡るということになります。そういう状況の中で浜松、あるいは静岡県で高等教育のシステムをどのように守っていくかがものすごく大きな課題だと思っています。県内の2つの国立大学が統合して、県内の高等教育のあり方に関して真正面から向かっていけるような体制を作るのは非常に意義があることであると思います。将来の大学がどうあらねばならぬか、学長を退任してから文部科学省等で大学評価の仕事をいくつかしていますが、多くの大学が目指しているのは個性化です。どこの地域でもミニ東大を作っても仕方がない。それぞれ個性をきちんと磨き上げていくということが大切であり、将来の大学を設計していくことがきちんとした高等教育システムを維持し、発展していくためには不可欠であると思っています。そういう意味で静岡大学と浜松医科大学が統合した上で、静岡地区大学と浜松地区大学の2つの大学を作っていくということは個性化に向けた大きなステップであると思います。意思決定の速さも大きなポイントであり、個性を磨くという意味でも浜松地区大学というのが大きなアドバンテージを持っていると思っています。私が学長のときに浜松医科大学と静岡大学と光産業創成大学院大学と浜松ホトニクスで「はままつ光宣言」を行いました。それに基づいてこれまでもいろいろな動きをしており、私が学長最後の年に今野学長とともに文部科学省に申請し、認められ光医工学の共同大学院を設置しています。このように浜松地区では個性を出す方向性がある程度見えています。この会議で言うのは場違いかもしれませんが、静岡地区も同じように個性を出すことを考えなければならないし、石井学長から話がありましたが、静岡にもいい素材がたくさんあります。それを生かして、それぞれの地域で個性を出して身軽で迅速な意思決定ができる組織を作っていくことが重要なことであると思っています。今のこの方向性で進んでいってほしいと思います。

(浜松市長)

ありがとうございました。  
大須賀会頭いかがですか。

(浜松商工会議所会頭)

経済界では、10年先、20年先がどうなるかということを中心に考えていく。再編というのは非常にいいことであると思う。これから人口減少の中で進むために必要なのは大きくなることである。地方銀行も合併に向かっている。合併し、組織が大きくなると大きい仕事ができる。全体的に世の中はそうなっている。合併ではいろいろな不公平が出てくるが、まずしようと決めたら、ダメな理由を考えるのではなく、どうしたらできるかということを考えることが大切である。まず、いい大学にするために何をするかを考えてもらいたい。企業でもダメな理由をどうしたらクリアできるかを考えるとうまくいく。組織が大きくなるといろいろな情報も入ってくるし、可能性が広がる。この統合・再編について皆さんの意見を聞いて、非常によいものであると感じた。よろしく進めてもらいたい。

(浜松市長)

ありがとうございました。議長いかがですか。

(浜松市議会議長)

一番心配していたのは、やはり、静岡大学の学長選挙の話です。マスコミにも取り上げられ、どういう方向性になるのか心配であったが、先ほどの石井学長と今野学長の話を伺い、方向性は担保されているということが分かりました。合意書と確認書を取り寄せ拝見したが、ここに書かれていることがこれから先しっかりと実行されることが一番の願いであります。そうすれば、こうした場も生きる場になると考えております。

今の浜松のものづくりの方向性を変えていかなければ、ここから先はないということは確かであると思っています。今までと同じやり方で、前には進めるし、今までのものを磨くことはできるでしょうが、それ以上のことが見えてこない。統合・再編という新たな形をもつことで新しいものづくりが目指せると思います。浜松市には、メーカーがありそれを支える中小企業もあることから土壌はあります。企業の方向性を変えられるようなものを作っていただけるとありがたいと思っています。再編というと、今、本市では区の再編もあります。変えるため、変わるためには変わっていかなければならないということです。浜松の未来を創るために新たな分野の創造に取り組んでいただきたい。

(企画調整部長)

先ほどご紹介いたしました、本日も欠席の御室浜松いわた信用金庫理事長からコメントをお預かりしているのでご紹介させていただきます。

「両大学が合意したとおり、1法人のもとに浜松地区、静岡地区それぞれに大学を設置するという方針を貫くことが大事である。法人は統合して、静岡大学、浜松医科大学はそのままということでは現状となんら変わらない。時代が急速に変化する中で現状維持ということは、退歩と同じである。挑戦する地域としていくためには、浜松地区、静岡地区に大学を設置してそれぞれの特色を生かしていくことが必要であり、それがそれぞれの地域の発展に資することとなる。」

以上でございます。

(浜松市長)

ありがとうございました。

一通り、ご意見をいただきまして、あまり座長が発言すべきではありませんが、一言申し上げます。

先ほど伊東センター長から個性化というご説明がありました。非常に大切なキーワードであると思います。石井学長にご提案がございます。新聞で川勝県知事が静岡県立大学のこと言及していました。静岡県立大学には薬学部と食品栄養化学部があります。静岡大学の静岡キャンパスには理学部と農学部があり、これが一緒になることでサプリメントやバイオ、創薬の一大拠点になれるのではないかと思います。静岡は県として医療の分野を成長産業分野として県の産業政策の柱に掲げています。また、静岡は薬のメーカーが多い地域であります。可能であれば、国立と公立の統合もできる状況であるため、統合することで静岡が創薬やバイオの一大拠点になり、浜松地域が医工連携拠点になれば、静岡県が目指す産業政策の大きな柱である医療全体の活性化に対して大きく寄与することになると思います。私が提案することではないかもしれませんが、次のステップとしてそうした構想も描いていただけると、それぞれの個性を持った特徴を持った新しい拠点大学ができると思っております。ご一考いただければと思います。

一通り皆様から意見をいただきましたが、改めて両学長からなにかコメントがありましたらお願いします。石井学長いかがですか。

(静岡大学長)

皆様から大変有益なご意見や力強いサポートをいただき心強く感じております。伊東センター長から個性化という話があり、市長からもお話しがございましたが、静岡地区はいろいろ可能性に満ちたところではありますが、21世紀に入ってから学生数も教員数も減って、自信を失っているところがございます。静岡大学の都合から言いますと、2000年に1、2年生から全部浜松で教育を受けるということになりました。それまでは、1年ないし、2年静岡で教養教育を受けてから浜松に移るということだったんですが、学生の便宜から考えると途中で移るのはコストや時間の負担をかけてきました。複数キャンパスでは珍しいですが、4年間一つのキャンパスで教育を受けることにしたわけです。学生にとってはいい

面が多くて、当初は1、2年生と一緒に部活をしていたのにできなくなったとか、工学部OBで静岡にいたころの人は他の学部の人と話すのは楽しかったという声はありましたが、思い切ったことをやりました。それで静岡キャンパスの学生が減ったということでもあります。

もう1つは、自己変革を遂げることができなかったことがございます。情報学部ができたということが静岡大学の歴史にとって大変大きかったことではありますが、教養部を廃止するという国の方針が示された際に静岡に新しい学部を作るか浜松に作るかの選択があったわけです。静岡に作れなかったのは静岡の強みを生かした新しい構想がなかったのが大きな弱点でありました。その結果、私のいた教員養成の教育学部の定数が500名から300名に減ってしまいました。その学生定員の大半が浜松キャンパスの情報学部、工学部に移りました。これは一重にやはり静岡で個性化、魅力を出すことに失敗したということが大きな要因であると思います。静岡大学の課題としては静岡キャンパスがいかに自立して新しいアイデアを出していくということが大きなポイントであると思っております。そういう意味で大変有益なご助言をいただいたと思っております。ありがとうございました。

(浜松市長)

ありがとうございました。今野学長いかがですか。

(浜松医科大学長)

大変貴重なアドバイスをいただきました。浜松市長から次のステップということで素晴らしいお考えであったと思います。私自身も勉強になるお話ばかりでした。

3点ほど追加させていただきます。これまでの違う大学同士の連携ではだめなのかという話がありますが、これではだめなんです。我々が目指しているのは、例えば、オンサイトジョブと言われますが、手術室の隣にラボがあり、現場で手術をやっているものを見ながら若い学生、大学院生がアイデアを出していくといったことをイメージしています。これは、連携でできるものではなく、同じ大学内でなくては到底できません。米国にモデルケースもありますし、いろいろなイノベーションが生まれています。我々と違って若い学生の頭脳はすごくてそんなこと考えるかということを書いてくるんです。これは手術に限らず、外来診療のあり方も同様です。アイデアをどんどんだしてもらい、市長が言われたウェルネス、健康、環境の新たな産業構造にマッチすると思います。

もう1つは国際化のことですが、先進的、革新的なことをすると、今の時代ではSNSですぐに広まります。そうすると海外から優秀な学生がきます。是非是非来てほしいと思っています。

3つ目は伊東センター長のおっしゃった18歳の人口減についてです。ひょっとすると半減とも言われているぐらいで、日本の大学は生き残りをかけた戦いをしなければなりません。伊東センター長は個性化と言われました。今のところ、医学部は安泰だと言われていますが、いずれ今の質を担保し、高度で安全な医療を提供するためには、今のままでは

生き残れないのではないかという危機感を私も幹部も持っています。そのソリューションが今回の新しい大学です。おそらく静岡大学浜松キャンパスの方々も同様に考えていると思います。単に一緒になるだけですがいいものができるわけではなく、また、小さくなると困ります、という話ではありません。一緒になってからさらに改革を進める必要があると思います。そうすることで初めて新しい世界が開けて若い人たちにとって、魅力的な大学になると思います。以上です。

(浜松市長)

ありがとうございました。他にございますか。では、伊東センター長お願いします。

(フォトンバレーセンター長)

先ほどはあえて、生き残りという過激な言葉を使いませんでしたが、まさにそういう時代です。生き残りをかけて改革をしていかないと淘汰される時代です。先ほどこの会議名称、浜松地区大学再編とあって、浜松地区の大学という両大学だけじゃなく、このタイトルでいいのかと思いましたが、市長から次のステップという言葉がありました。私自身は18歳人口の流れからいってもきちんとした高等教育のシステムを地域で考えていかなければならない時期であると思っています。この浜松医科大学と静岡大学の統合・再編するというのは静岡県内の高等教育の再構築の第一歩であるという位置づけで市長にも県知事にも考えていただきたいと思っています。例えば、浜松キャンパスと浜松医科大学が一緒につくる浜松地区の大学は光医工学が1つのキーワードであると思います。この地区に存在する光産業創成大学院大学も光と産業の応用で非常に強い個性を出しています。今すぐではないが、全体の地図を見たときに浜松地区大学の個性と同時に、浜松地区の個性を高等教育の再編によって創り出すことがとても大切であると思っています。

フォトンバレーセンターではフォトンビジョンという光を中心としたビジョンを作ってそれに基づいて事業を進めています。今年度からフォトンビジョンの構成の中に静岡文化芸術大学に入っていて、静岡文化芸術大学の学長にも参画していただいてビジョンを検討していく体制を作りました。文芸大と光に何の関係があるかと思うかもしれませんが、芸術、デザインの分野はあらゆる分野に必要です。そういうところとの連携、協力関係を将来的にどうやっていって県内の高等教育のシステムをどう再構築するか、ぜひこの話を2大学の統合・再編に終わらせず、県内の高等教育システムの再構築というところまでもっていただきたいと思っています。もちろん私立大学や公立大学を含めて全体を俯瞰する形ということです。

(浜松市長)

他にご意見はよろしいでしょうか。

本日は本当に忌憚のないご意見をいただき誠にありがとうございました。次回は本日のご意見を基に深化させ深めて具体的な期待等について突っ込んだ議論をしていきたいと思  
います。引き続きよろしく申し上げます。

## 5 その他

(浜松市長)

では、次第5に移ります。事務局から説明をお願いします。

(企画課長)

次回の開催についてでございます。次回は年が明けて令和3年1月、もしくは2月に開催したいと考えておりますのでスケジュールの調整等よろしく申し上げます。次回は本日の議論を踏まえて、産官学の連携などにつきまして、大学統合・再編を進めることについて地元関係者の理解、期待についてまとめていきたいと考えております。よろしく申し上げます。事務局からは以上でございます。

(浜松市長)

時間となりましたので終了します。

## 6 閉会

(企画調整部長)

それでは、以上を持ちまして第1回浜松地区大学再編・地域未来創造会議を終了させていただきます。ありがとうございました。